

Brooklyn DAC+の導入(24)

—総合試聴—

1. はじめに

Brooklyn DAC+導入後の試聴も進捗し、インフラノイズの UACU-700 も追加されましたので、I 氏、M 氏、O 氏をお招きして総合的に試聴していただくことにしました。

2. Brooklyn DAC+の試聴方法

I 氏、M 氏、O 氏はアナログファンですので、フォノイコの機能の試聴がお目当てですが、MQA-CD についても比較していただくことにします。このために、予め MQA-CD と対応するアナログ盤をリストアップして準備し、オーディオ資料室に掲載しました。

[同一曲各種メディア対比表 4](#)

アナログの試聴は、My Sonic Signature Gold を装着した LINN LP-12 のフォノ出力をトランスの My Sonic Stage1030 経由で、Brooklyn DAC+のアナログ入力端子に入力します。アナログ入力の設定は、MM フォノ入力とします。

MQA-CD は、トランスポートして 4716 信楽を使用し、DACU-500 を経由して S/PDIF デジタル入力端子 1 に入力します。また、fidata により外付け CD ドライブより読み出して、UACU-700 を経由して USB 入力端子に入力します。MQA-CD のリッピング WAV 音源は fidata の NAS から読み出して、UACU-700 を経由して USB 入力端子に入力します。

さらに SACD は Marantz SA11-S2 で再生し、Sonica DAC の LINE 入力を経て DAC-3000 経由で Brooklyn DAC+の SDIF 入力端子に入力します。BPODCH のストリーミング再生では、DMR-UBZ1 から Sonica DAC の S/PDIF 入力を経て DAC-3000 経由で Brooklyn DAC+の SDIF 入力端子に入力します。

これらの経路を BrooklynDAC+再生経路としてオーディオ資料室に掲載しました。

[BrooklynDAC+再生経路](#)

以上から、アナログの音質は、これまでのフォノイコの iPhono から Brooklyn DAC+のフォノ入力への変更の評価になります。

デジタルの音質は、Brooklyn DAC+の DAC としての音質の評価となりますが、これに UACU-700 や DACU-500 の効果も加わり、その上に MQA-CD のフォーマットとしてのポテンシャルを評価することになります。

SACD や BPODCH の再生は、DAC-3000→Brooklyn DAC+の SDIF 伝送の評価となります。

3. Brooklyn DAC+の試聴経過

前半は、MQA の再生と対応するアナログや SACD、CD などとの比較試聴を中心に進め、後半は Brooklyn DAC+のフォノ入力をアナログ再生でじっくり評価していただくことにしました。

MQA の再生では、通常の CD と違い、解像度の向上や 3 次元の空間表現の向上を確認していただきました。SACD、CD もこれまでより音質が安定しています。

アナログについては、プレス違いの盤をいくつか比較してみました。予想以上に音質の違いがあることが分り、盤漁りの苦勞と楽しみがあると言えます。

結線の手間の都合上、DACU-500 や UACU-700 の効果を分離して確認することはできませんでしたが、UACU-700 を CD ドライブ側に装着有り無しでリップングした WAV の再生で、その違いを確認していただきました。

細かいところでは、アナログボリュームとデジタルボリュームの音の違いを確認していただきましたが、デジタルボリュームの方が見通しの良い音です。

アナログフアンのお三方の感想は、どうしてもアナログへの賛辞に傾きがちですが、私的には、モーツアルトのレクイエムのような大編成ものでは定位と分離の甘さや、低音の曖昧さみたいなものが気にかかる場所も残っています。定位と分離の問題は、カートリッジのクロストークによるもので避けられないものですが、その溶け合いが一つの魅力とも言えないことはありません。低域の問題は、これもアームの追従能力の問題で、オルトフォンのような重量級カートリッジ対応のため、昔からの FR-64S をそのまま使用していますので、高感度のアームに変更することも考えられます。

4. まとめ

MQA の再生と対応するアナログや SACD、CD などとの比較試聴を行い、それぞれの到達点を確認していただくことができました。こうやって比較していくことにより、アナログの新たな課題も見えてきました。

以上